

[特集Ⅱ]

名古屋大学教育学部サマー・スクールの教育効果

— 受講者が持つ学部を選択基準に焦点を当てて —

出口 拓彦*・朴 賢晶**・吉田 俊和**

問 題

方 法

調査対象者

測定事項

手続き

結 果

学部の選択基準

サマー・スクールの教育効果

1. 事前アンケート

2. 中間アンケート

3. 事後アンケート

4. 「名古屋大学教育学部のイメージ」の変化（事前・中間・事後アンケート）

5. 「名古屋大学教育学部で学ぶことのイメージ」の変化（事前・中間・事後アンケート）

6. レポートの結果

考 察

引用文献

問 題

名古屋大学教育学部では、夏期休暇期間に、高校生を対象としたサマー・スクールを実施している。このサマー・スクールは、「高校生に本学部での学びのあり方を伝え、彼らの進路決定がスムーズにいくこと、さらにいえば、高校での学びと大学での学びを繋いでいく高大連携も目指されている」（速水・金井・三後，2003）教育である。本研究は、2回目のサマー・スクールに関する報告となる。

速水ら（2003）は、サマー・スクールの受講者を対象に、事前アンケート・中間アンケート・事後アンケートと、3回にわたって縦断的な測定を行い、その教育効果について検討している。そして、受講者の満足度は概ね高く、また、「サマー・スクール参加によって参加者が本学部へのイメー

* 藤女子大学人間生活学部

** 名古屋大学大学院教育発達科学研究科

*** 名古屋大学大学院教育発達科学研究科，名古屋大学附属中学校・高等学校

ジを、単に教育学、心理学といった看板ではなく、学ぶことのより概念的な意味を理解するに至った」(p.56)可能性などを報告している。

なお、速水ら(2003)の報告では、男女別の集計はなされているものの、基本的には、受講者の全体的な回答傾向を基に、その効果について論じられている。しかし、サマー・スクールの教育効果は、学部を選択基準など、受講者の大学に対する態度によっても異なる可能性が考えられる。

このため、本研究では、受講者が持つ「学部を選択基準」に焦点を当てつつ、サマー・スクールの教育効果について検討することとした。

方 法

調査対象者

平成15年度のサマー・スクールに参加した、高校2年生67名(男性19名、女性48名)。

測定事項

速水ら(2003)による質問紙を用いた。質問紙は、事前アンケート、中間アンケート、事後アンケートの3種類作成した。各質問紙(アンケート)の内容は以下の通りである(以下①～③まで速水らp.40-41より引用、一部加筆・変更した)。

- ①事前アンケート 申し込み動機、サマー・スクールへの期待、大学へ行く目的、大学の学部を選ぶ際に重視することがら、名古屋大学教育学部のイメージ、名古屋大学教育学部で学ぶことのイメージ、意見・感想欄(「これから参加することについて、疑問なことや心配なことがあったら、以下に書いて下さい」と質問した)。
- ②中間アンケート 3日間の授業で学んだこと、参加意欲とその理由、参加満足度とその理由、日程に関する評価、名古屋大学教育学部のイメージ、名古屋大学教育学部で学ぶことのイメージ、サマー・スクールを後輩に勧める程度、進路に役立ったかどうかについての自由記述、意見・感想欄(講座に対する感想や疑問点、レポート作成に対する疑問や心配なこと、の2点について質問した)。
- ③事後アンケート レポートへの取り組み意欲とその理由、参加満足度とその理由、高校での学習との関連についての自由記述、名古屋大学教育学部のイメージ、名古屋大学教育学部で学ぶことのイメージ、サマー・スクールを後輩に勧める程度、進路に役立ったかどうかについての自由記述、意見・感想欄(「感想や疑問点、もっと取り上げてほしいテーマなどの提案」について質問した)。

なお、「名古屋大学教育学部のイメージ」については、事前・中間・事後アンケートの全てにおいて測定を行った。

手続き

同一の受講者に対して、事前・中間・事後アンケートの3つの質問紙それぞれに対して回答を求

めた。事前アンケートは、サマー・スクール初日のオリエンテーション直後に集団で実施した。中間アンケートは、最終日に各コースごとに実施した。事後アンケートは、最終レポート提出の際までに回答し、最終レポートと一緒に回収した。なお、各回の質問紙の回答者数は、事前67名、中間62名、事後41名であった。

(なお、実際に使用したアンケートのレイアウトや手続きの詳細等については、速水ら(2003)を参照されたい。)

結 果

学部を選択基準

本研究では、受講者が持つ学部を選択基準によって、教育効果がどのように異なるのか、ということに焦点が当てられている。このため、事前アンケートによって測定された学部を選択基準(「大学の学部を選ぶ際に重視することがら」)に対する回答を基に、受講者を重視群・非重視群に分類し、教育効果の差異について検討した。

具体的には、まず、因子分析(主成分分析、バリマックス解)を行い、固有値の減衰状況と因子の解釈可能性から2因子解を選択した。第1因子は、「合格可能性」「親の勧め」「教師の勧め」「学校の中間・期末テストの成績」といった項目から構成されており($\alpha = .60$)、「周囲の期待・合格可能性」の因子と命名した。第2因子は、「その学部で扱う学問分野への適性」「将来就きたい職業」「大学の名前(負の負荷量)」「その学部で扱う学問分野への興味」といった項目から構成されており($\alpha = .57$)、「興味・適性」の因子と命名した。次に、因子ごとに項目への回答を合計して平均値を算出した。各因子の平均値(標準偏差)は、「周囲の期待・合格可能性」は3.33(0.67)、「興味・適性」は4.18(0.57)であった。

なお、サマー・スクールの目的は、前述したように「高校生に本学部での学びのあり方を伝え、彼らの進路決定がスムーズにいくこと」(速水ら, 2003)である。このため、本研究においては、サマー・スクールの目的とより関連が深いと思われる、「興味・適性」の因子に注目し、学部選択の際に、このような観点を重視する受講者(重視群)と重視しない受講者(非重視群)の間における教育効果の相違について検討するものとした。

サマー・スクールの教育効果

尺度によって測定された項目については、各項目の選択率を、「興味・適性」重視群・非重視群ごとに算出し、比較した。複数選択が可能な設問については、1つの項目のみ選択した場合は1、2つ選択した場合は $\frac{1}{2}$ 、3つ選択した場合は $\frac{1}{3}$ というように重み付けをした(複数選択可の項目については、見出しの括弧内にその旨を記した)。自由記述による回答については、全体的な傾向について、例を挙げながら記述した。

以下に、事前・中間・事後アンケートの順で結果を示した。なお、「名古屋大学教育学部のイメージ」については反復測定を行っているため、本設問に関しては、事後アンケートに関する記述の後にまとめて記載した。また、質問紙による測定結果のみならず、レポートの結果についても、最後に記載した。

1. 事前アンケート

1) 申し込み動機 重視群・非重視群ともに「内容に興味を持ったから」が顕著であったが、このような回答を行った者は、重視群の方が多かった (Figure 1-1)。一方、「友人に誘われたから」という回答は、非重視群に多かった。

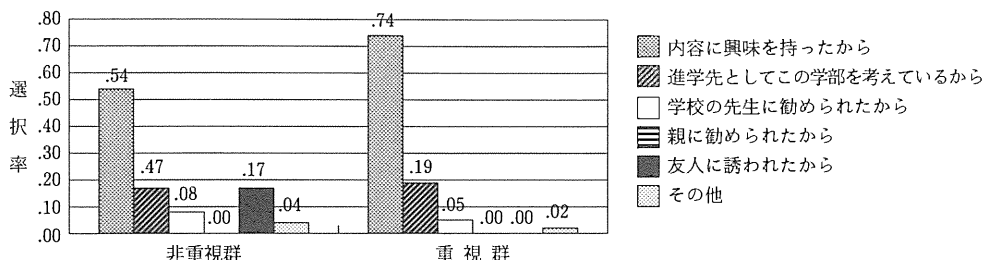


Figure 1-1 申し込み動機

2) サマー・スクールへの期待 「教育学、心理学が自分に適しているかどうか確かめること」「将来、教師という職業を考えているので、いったい、どういうことが必要なのか、何をすべきなのかを少しでも解決する糸口になればと思っています」という自分の適性や進路を考える際の参考としたいという回答が多かった。また、「私は大学で心理学を学びたいのですが、実際にはどのようなことをどんな風に学ぶかを知ることができることを期待しています」「『心理学』という学問そのものについて、詳しく知りたいです。『心理学を学ぶ』とはどのようなことなのか、また、どのようにして学ぶのか、などです」というように、心理学という学問について知りたいという回答も多く見られた。この他に、「大学でどういうことを勉強できるのか、どんなふうに学べるのか知りたい」「大学の講義に近いものを体験したい。学生の人と話したい」という大学での授業ないし大学生との交流に関する回答も見られた。

3) 大学へ行く目的 (3つ以内で選択) 「興味のあることを学ぶため」「幅広い知識を身につけるため」などの回答が顕著であったが、このような回答を行った者は、重視群の方が多かった (Figure 1-2)。一方、「社会人になるための基礎能力を形成するため」という回答は、非重視群に多かった。

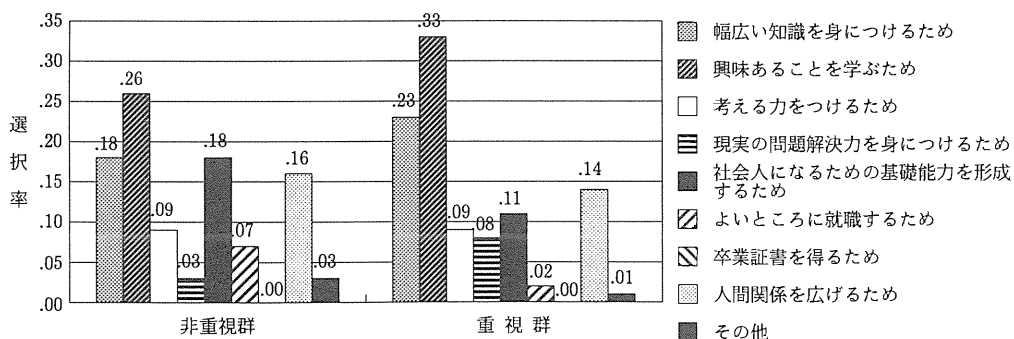


Figure 1-2 大学へ行く目的

4) 意見・感想 「自分が他の人や講義についていけるか心配」「レポートがしっかりかけるか心配です」といった、初めて経験する分野の授業を受けることや、レポートを書くことに対する不安などに関する記述が見られた。

2. 中間アンケート

1) 3日間の授業で学んだこと 以下に、各コースごとに記載する。

コース1では、「外国の教育にかんすることについて。また、今まであまり知らなかったインドネシアとネパールの文化を知ることができた。日本は本当に恵まれた環境にあるという事を実感した。今学ぶことができて本当に幸せだと感じる事ができた」「インドネシアやネパールの教育のことや宗教、文化などいろいろなことを学び、それについて深く考えられたと思う。教育学部はただ教師になるためだけのものではないと思った」というように、授業内容に関するものだけでなく、自分がいる教育環境についてなど、より幅広い視点に立った記述も見られた。

コース2では、「教師の大変さ、授業作り。実際、授業をしてみて、うまく話せなくて焦った」「先生が授業をするには、どのくらい考えて、うまく教えてくれているかがわかった」という、教えられる立場から、教える立場の視点に立ったことから学んだ事柄に関するものが多かった。

コース3では、「一つの物事に対してのいろいろな見方。他の人との意見の交換からまた違う考え方をする事」「人間が普段得ている情報は、様々な影響を受けていて、一つのことで人それぞれの受け止め方や考え方があるということ」という、物事の見方や考え方の多様性について触れたものが多かった。

コース4では、「人が無意識のうちにどういうことを考え、行動しているか、また、その行動によってどんな影響があるか、ということ学んだことが特に印象に残っています。知らず知らずのうちに先入観を持った目で見えていたり、決め付けたりしていることに気づかされました」「人間がどのように物事を考え、行動しているのかという問題の根本に少しだけでも触れることができたような気がしました」という、人の思考や行動について理解できたという回答が多かった。

2) 参加意欲とその理由 (2つ以内で選択) 「非常に意欲的に参加した」「意欲的に参加した」という回答がほとんどであった (Figure 2-1)。「あまり意欲的に参加しなかった」「意欲的に参加しなかった」という回答は見られなかった。

意欲的に参加した理由については、「面白かったから」「自分の興味にあったから」という回答が多かった (Figure 2-2)。「難易度が適当だったから」という回答は見られなかった。

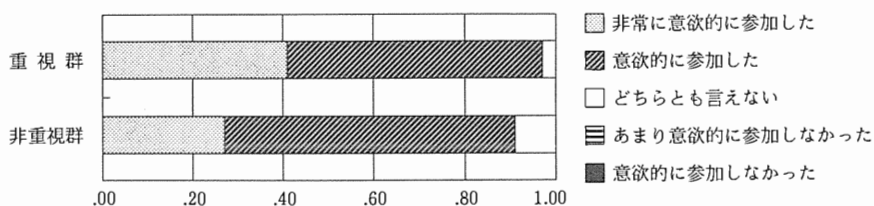


Figure 2-1 サマー・スクールへの参加

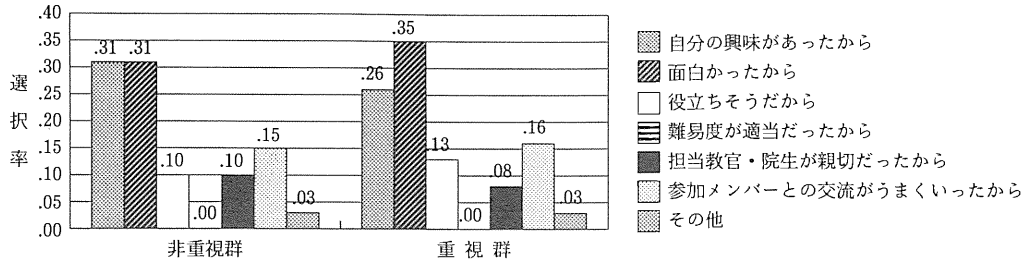


Figure 2-2 意欲的に参加した理由

3) 参加満足度とその理由 (2つ以内で選択) 「非常によかった」「よかった」という回答のみで、「どちらとも言えない」よりも低い評価は見られなかった (Figure 2-3)。

満足した理由については、重視群は「有意義だったから」「参加メンバーと知り合えたから」という回答が多かった (Figure 2-4)。一方、非重視群は、これらの回答の他に、「授業の雰囲気がわかったから」と回答した者も比較的多く見られた。

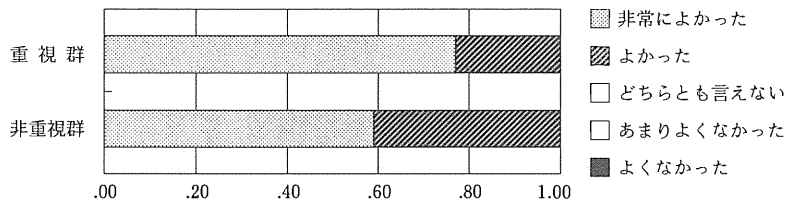


Figure 2-3 サマー・スクールへの参加満足度 (中間アンケート)

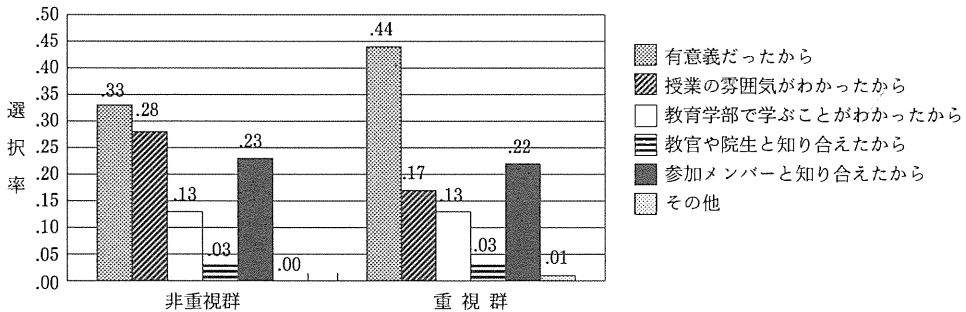


Figure 2-4 満足した理由 (中間アンケート)

4) 日程に関する評価 重視群については、「ちょうど良かった」「短すぎた」という回答が多かった。一方、非重視群については、「ちょうど良かった」という回答がほとんどであった (Figure 2-5)。「短すぎた」を選択した者は、平均して「5.74日ぐらいが適当」と回答していた (標準偏差 1.45)。「長すぎた」を選択した者は、平均して「2.00日ぐらいが適当」と回答していた (標準偏差 0.00)。

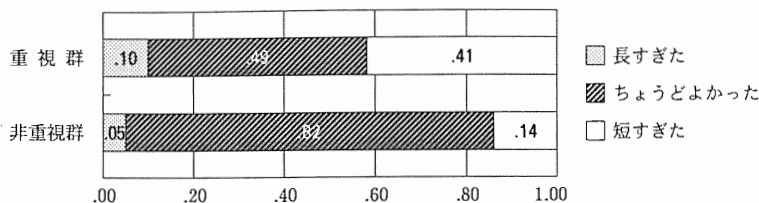


Figure 2-5 日程に関する評価

5) サマー・スクールを後輩に勧める程度 「ぜひ勧める」「勧める」という回答が多かった。「あまり勧めない」「絶対勧めない」という回答は見られなかった (Figure 2-6)。

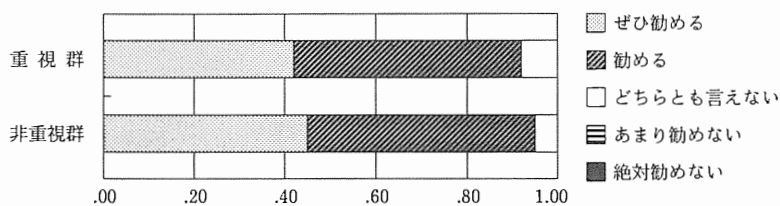


Figure 2-6 サマー・スクールを後輩に勧める程度 (中間アンケート)

6) 進路に役立ったかどうかについての自由記述 「とても役に立ったと思う。自分のやりたいことがちょっとわかったと思うし、講座の内容を通して、いつも当たり前のように学校へ行って学び、ということ自体をみなおすことができたと思う。名大の施設も3日間過ごすことでよくわかった。(コース1)」「役に立った。もともと臨床心理士に興味があったのだけど、他のいろいろな心理学のこともわかり、興味を持てた。また、臨床心理士にも他の基となる心理学が必要だとわかった。(コース3)」というように、ほとんどの受講者が「役に立った」という趣旨の回答を行っていた。また、少数ではあるが、「進路としてではなく、一般教養的なものとして役に立ちました」「進路に関係するかどうかわからない」という回答も見られた。

7) 意見・感想 講座に対しては、「他の学部もこのようなことをやってほしいと思う。この講座は、学ぶ立場から教える立場に変わることがどれだけ大変か、伝えることが難しいことがわかった。(コース2)」「思っていたことと、やったことが違ったので、はじめは少し戸惑ったけど、思っていた心理だけじゃなくて、自分の知識が多くなったと思う。(コース4)」などの意見・感想が見られた。

また、レポートに対しては、「テストとかがあって忙しいので、たいそうなものできないかもしれないので、心配。そして、パソコンもないので資料集めをどうしようかと悩み中です」「時間内にできるというなあと思っています。あと、言っていることが支離滅裂にならないように」などの回答が見られた。

3. 事後アンケート

1) レポートへの取り組み意欲とその理由 (2つ以内で選択) 重視群については、「非常に意欲的に取り組んだ」「意欲的に取り組んだ」「どちらとも言えない」という回答が多かった (Figure 3-

1)。非重視群については、「意欲的に取り組んだ」という回答が多かった。また、重視群・非重視群ともに僅かではあるが、「あまり意欲的に取り組まなかった」「意欲的に取り組まなかった」という回答も見られた。

意欲的に取り組んだ理由については、重視群については、「難易度が適当だったから」「自分の興味にあったから」「レポート作成の仕方がわかったから」という回答が多かった (Figure 3-2)。一方、非重視群については、「指導が適切だったから」「自分の興味にあったから」「レポート作成の仕方がわかったから」という回答が多かった (「あまり意欲的に取り組まなかった」「意欲的に取り組まなかった」と回答した者は除外して集計した)。

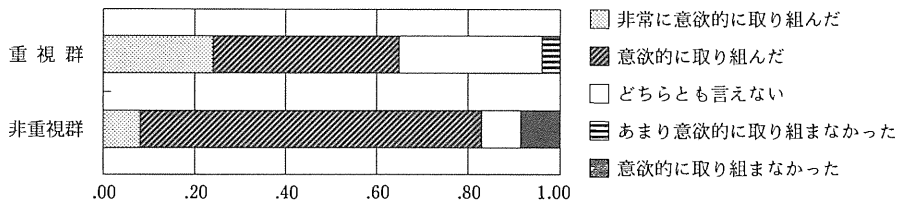


Figure 3-1 レポートへの取り組み意欲

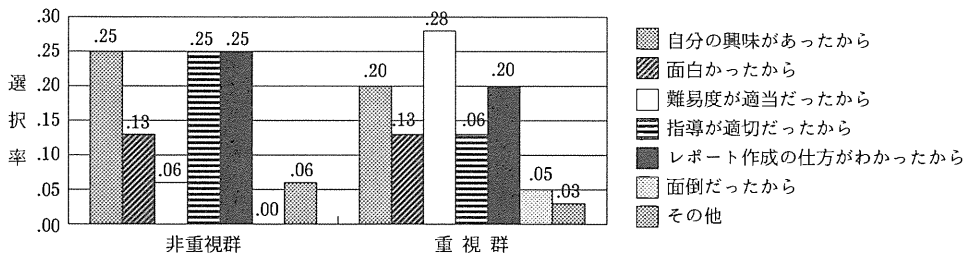


Figure 3-2 積極的に取り組んだ理由

2) 参加満足度とその理由 「非常によかった」「よかった」という回答のみで、「どちらとも言えない」より低い評価は見られなかった (Figure 3-3)。

満足した理由については、重視群は「有意義だったから」という回答が多かった (Figure 3-4)。一方、非重視群は「有意義だったから」という回答の他に、「授業の雰囲気わかったから」と回答した者も比較的多く見られた。このような傾向は、中間アンケートの結果とほぼ同様であった。

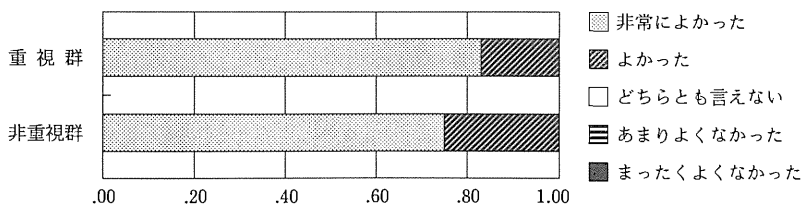


Figure 3-3 サマースクールへの参加満足度 (事後アンケート)

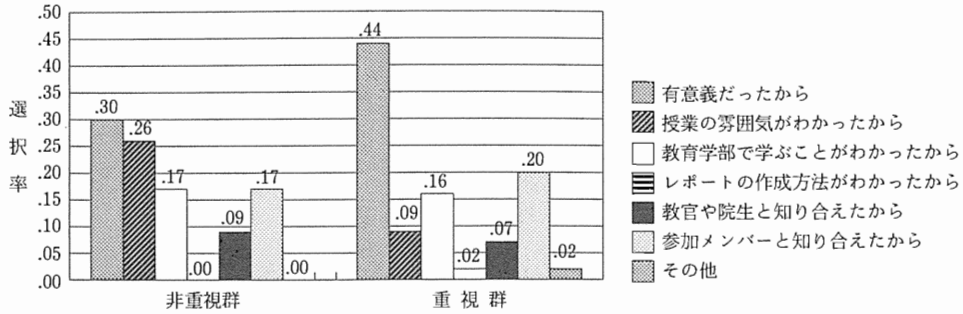


Figure 3-4 満足した理由（事後アンケート）

3) 高校での学習との関連についての自由記述 比較の様々な内容の回答が見られた。例えば、「グループ作業のときに特に思ったことは、自分の意見をはっきり言うことです。国語の授業でも何度かグループで話し合う機会がありましたが、図を使うなどしてわかりやすく相手に伝えることが、役立てていけたらと思います」「物事を考える時の方法が増えたような気がする。いろいろな角度からという考え方を教えてもらえました。あと、話し合いをすることの楽しさを知りました」というような、学習の仕方や思考の方法について学ぶことができたという回答があった。また、「この名大の教育学部に入りたいという気持ちが一層強くなったので、頑張って勉強して入れるように頑張りたい」「大学へ向ける意志が高まり勉強を頑張ろうと思った」という受験への態度に関する記述も見られた。この他に、「今回サマースクールを受けたことにより、自分の視野が少し広がったと思う」「今までは、自分の興味があるものしか関心を広げなかったけれど、それ以外のこともいろいろ調べていくと、とても面白いということがわかりました。これからはいろいろなことに興味や関心を持って勉強にとり組めそうです」という、興味・関心の範囲や視野が広がったという回答もあった。

4) サマー・スクールを後輩に勧める程度 中間アンケートの結果と同様に、「ぜひ勧める」「勧める」という回答が多かった。「あまり勧めない」「絶対勧めない」という回答は見られなかった (Figure 3-5)。

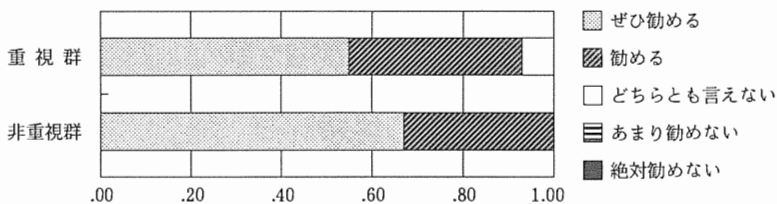


Figure 3-5 サマー・スクールを後輩に勧める程度（事後アンケート）

5) 進路に役立ったかどうかについての自由記述 「私にとってこのサマースクールは本当に役に立った。それは勉強とは受け身ではいけないということがとてもよくわかる授業だったからだ。講義をきいて終わるのではなく、自分の疑問などを尋ねたりすることでより理解することができるといことがわかった。そのためにも自分に本当に興味のあることを探して進路を選択することが大

切だとわかったからだ」「非常に役に立ったと思います。『教育学部って何をやるの?』と、この学部の根本がいまいちわかっていなかった私にとって、サマースクールは、学部内容を身をもって知る、大変よい機会になり、浅い理解ながら、学べる内容もわかったのです。」など、多くの受講者が役に立ったと回答していた。また、「進路について、ほとんど決まっていなかったけど、やはり、教師がいいなと思った」というように、当初持っていた進路への希望を強めたという回答があった。その一方で、「教師は自分の中では、夢の存在でしかなかったのが、サマースクールに参加して、教師の現実を知った。教師以外の道を考えてみようと思った。今までは、教師一本だったから。決してあきらめたわけじゃない」という回答も存在した。

6) 意見・感想 「正直、なんとなく応募しました。だからたいして希望もしてませんでした。でも、参加してみて、とても楽しかったし、なによりとても良いひとたちと出会えました。私の周りにいないタイプの人。同じ考えをする人に初めて出会えました。それはとても実りのあることだったと思います。あと、とても親切に一生懸命接してくれた大学生の〇〇さんにも感謝です。とても楽しい3日間でした。ありがとうございました」「授業もおもしろかったし、参加者とも仲良くなったので、3日間はあっという間でした。二日間で台風で途中からしか参加できなかったのが残念です。3日間ではなく、もう少し長い期間学べたらいいなと思いました」など、様々なものがあったが、ほとんどの受講者がサマー・スクールに対して肯定的にとらえていた。なお、「もう少し期間が長くてもっと学べたら良かったなあとと思いました」というような開催期間の延長についての要望もいくつか存在した。

4. 「名古屋大学教育学部のイメージ」の変化（事前・中間・事後アンケート）

肯定的なイメージ（e.g. 「明解な」「効果的」）は全般的に上昇し、否定的なイメージ（e.g. 「閉鎖的な」「不親切な」）は低下している傾向が示された（Figure 4-1, Figure 4-2）。

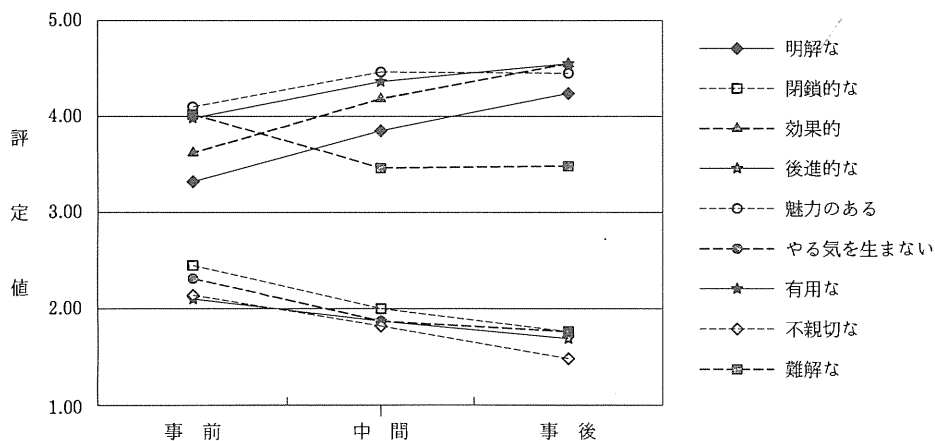


Figure 4-1 名古屋大学教育学部のイメージの変化（重視群）

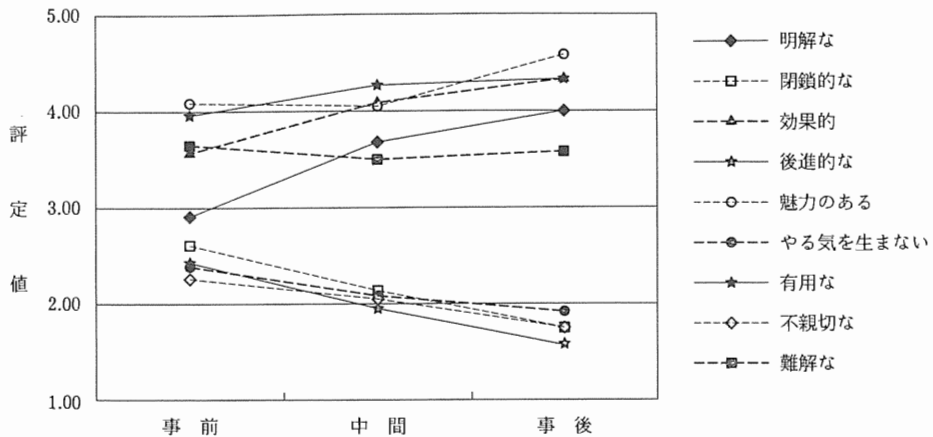


Figure 4-2 名古屋大学教育学部のイメージの変化 (非重視群)

5. 「名古屋大学教育学部で学ぶことのイメージ」の変化 (事前・中間・事後アンケート)

事前アンケートでは「教育」「心理」などの記述が多かった。一方、中間アンケート・事後アンケートでは、「教えたことを明確にすること (中間)」「教える側としての心構え (事後)」など、より具体的な記述が増える傾向にあった。また、「普遍的な原理 (事後)」「人になにかを与えられるということ (事後)」というような比較的高度な概念等について触れられた回答も見られるようになった。

なお、平均記述数 (標準偏差) の推移については、重視群・非重視群ともに増加する傾向が見られた (Figure 5)。

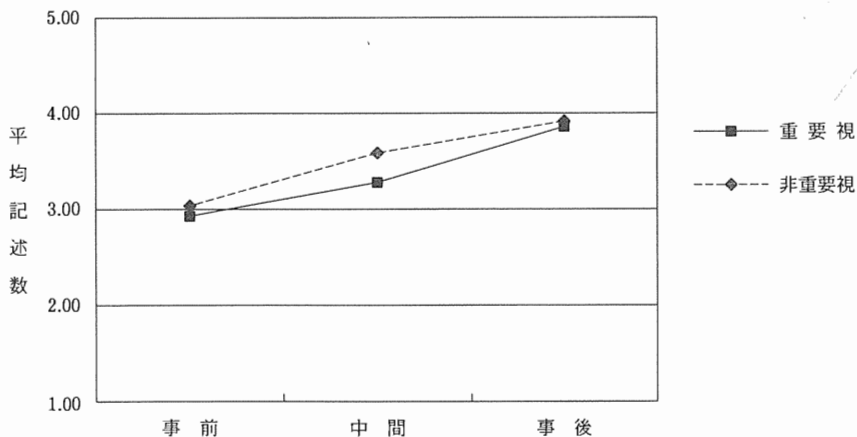


Figure 5 名古屋大学教育学部で学ぶことのイメージに対する平均記述数の変化

6. レポートの結果

重視群・非重視群ともに、ほとんどの者がAまたはBの評価を受けていた (Figure 6)。

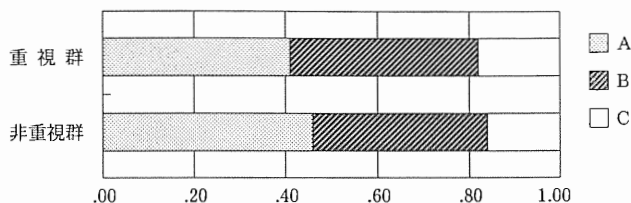


Figure 6 レポートの評価

考 察

学部の選択基準別に、事前アンケートによって測定された「申し込み動機」や「大学へ行く理由」に対する回答を比較したところ、非重視群は、重視群に比べて、「友人に誘われたから」サマー・スクールに申し込み、「社会人になるための基礎能力を形成するため」に大学に行く回答する者が多かった。つまり、学部の選択基準によって、申し込み動機や大学へ行く理由が異なっている傾向が示された。一方、中間アンケート・事後アンケートによって測定された「参加満足度」や「サマー・スクールを後輩に勧める程度」については、重視群・非重視群間に、さほど顕著な相違は見られなかった。

また、サマー・スクールに満足した「理由」については、重視群は「有意義だったから」という回答が多かった。一方、非重視群は「授業の雰囲気があったから」と回答した者も比較的多く見られ、学部の選択基準によって、多少の相違が存在していることが示された。このことから、受講者が持っている学部の選択基準によって、サマー・スクールを評価する視点が異なっていた可能性が推測される。

しかし、重視群・非重視群共に、高い満足度および「後輩にサマー・スクールを勧めよう」とする強い態度が示されており、また、「名古屋大学教育学部に対するイメージ」も、肯定的な方向へと変化していた。さらに、「名古屋大学教育学部で学ぶことのイメージ」も、より高度な概念について触れられた回答へと変化していた。このような結果は、速水ら（2003）と同様のものであり、サマー・スクールは、安定した高い教育効果を持っている可能性が示唆された。

これらのことから、名古屋大学教育学部で実施されたサマー・スクールは、これを評価する受講者の視点は多様であったにもかかわらず、多くの生徒に対して、肯定的な効果を及ぼすことが可能な内容であったと考えられる。

なお、事前アンケートの回答者67名のうち、事後アンケートに回答した者は41名と、全体の6割強程度であった。このため、事後アンケートによる測定結果は、肯定的な方向へ偏っている可能性も考えられる。また、レポート提出者の数も42名と、比較的少ないものであった。したがって、より多くの受講者がレポートを提出することが可能となるような指導の方法について、今後は検討していく必要がある。

引用文献

速水敏彦・金井篤子・三後美紀 2003 サマー・スクール参加者の参加意識の変化について—事前・中間・事後アンケートの結果から— 中等教育研究センター紀要（名古屋大学），3(2)，39-76.